



写真右/キャプテンの飯田君。今年度発行した部誌『叢雲』7巻のあとがきでは「この部で皆と活動するのは楽しかったです。塾高で文芸部に入ってよかった」と充実した3年間に思いを寄せた。写真左/和気満々とした雰囲気での部長の良さが伺える部員たち。

言 葉を紡ぎ、今、書きたいことを、ひとつの物語として形にしていこう。それが文芸部の主な活動だ。新入生歓迎会と日吉祭にあわせて発行している部誌『叢雲』には、部員たちが書き上げた短編小説がおさめられている。ミステリー、SF、歴史、青春小説……とカテゴリーはさまざまだが、どの作品も読み応えがあり、図書館での閲覧のみに留めておくのは惜しいとさえ感じるほど完成度が高い。

現在の部員は7名。普段は協育棟のビブリオラウンジなどに集まって活動を行っているが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、皆で集まった活動はやはり難しかったと振り返る。「普段はリレー小説といって、数行ずつ原稿用紙を回して、皆で違う物語を書き、最終的に完成した作品を楽しんだり、テーマを決めて物語を書くという即興大会をしたりしています。ただ今年オンラインでの活動になってしまったので、各自短編小説を書き、オンラインで集まって、それぞれの作品について批評会をするといった活動をしていました」(松岡君・2年)

そうした日々の活動により、



文芸部の部誌の歴史は古く、定期的に冊子名を変更し発行を続けてきた。記録に残っている最古号は1958年に発行された『耕人』。現在の『叢雲』は2017年より発行がスタート。図書室で閲覧できるので、ぜひ手に取ってほしい。



高校生らしからぬ表現力を身につけ、読み応えのある作品を生みだしているわけだが、すでに小・中学生時代から小説を書き始めていたという部員もいるというから驚きだ。「主に歴史小説を小学生の頃から書いていました」(水野君・2年)。「普通の2年と3年のときに労作展(展覧会)で小説を書き、高校でも創作活動を続けたかったので文芸部に入学しました」(鎌

内君・1年)。
8年前より部長を務める葛西先生は、「興味の対象も各々違いがあり、その個性が作品にも表れています。活動の内容はメンバーや代ごとに異なりますが、

彼らのやりたいことができる場として、今後も文芸部が続いていくことが大切だと考えています」と語り、彼らの創作活動を温かく見守っている。

さて、今後はどんな物語を書いていきたいのか。歴史好きが高じて、過去に上代日本語を使い小説を書いたという3年生の菱田君を筆頭に語ってもらった。「大学に行っても創作は続けたいと思っています。今度は長編のSF歴史小説を書いてみたいですね」(菱田君・3年)。「1年生のときは長編ばかりでしたが『叢雲』に寄稿した『侵入者』という作品のような短編も面白いなと思ったので、これからは短編をたくさん書いてみたいですね」(菊地君・2年)。「文系なので科学的根拠を伴うものは少々苦手ですが、勉強して長編SFに挑戦したいです」(工藤君・1年)。

想像力を働かせ、未知の領域に踏み込む際は勉強を惜しまない。創作活動を通して学びを深めている姿がそこにはある。

今後も、読者であるOBの皆さんのところに創作活動のための取材依頼があれば、ぜひ応じてあげてほしい。それが彼らの学びとなり、秀逸な作品を生み出すことにもつながるはずだ。

唯一無二の物語を 文才たちが 豊かな発想で紡ぎ出す。

文芸部

部誌の発行や日吉祭での展示など、無類の小説好きが集まり、思い思いの創作を楽しむ、文芸部の活動とは?

短編小説集の部誌「叢雲」を年2回発行!



写真右/今年度の部員たち。左から飯田克彦君(3年)、松岡潤君(2年)、工藤日向太君(1年)、菱田翔彦君(3年)、菊地拓馬君(2年)、水野庸介君(2年)、鎌内泰斗(1年)。写真左/部長の葛西まり子先生。